



9 10 1 2 3 4 5 6 7 8
JAPAN
9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

日本歲時記敘

須佐立
松文庫

伊耆氏命，羲和欽若，皋天曆象，日月星辰，敬授人時。其欽敬如此，其故何也？盍聖人推測天道，治曆明時，是事天治民之事，而治之洽也。天下之吏莫先於此，莫大於此。堯之初政，未及他事，而先之者，良有以也。振古以來，言曆象者，世有其人，屢改寢精靡，有差貸唯如。授時勤

民曆家之所未言也如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭塞典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助然其所載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也

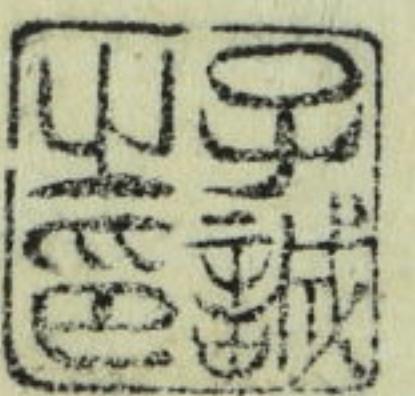
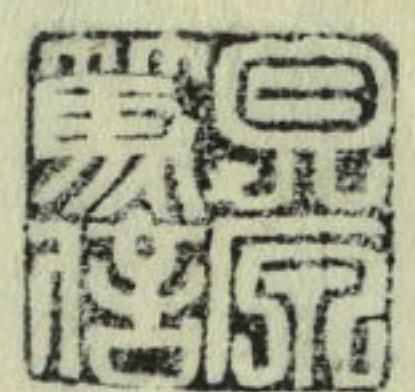
本邦自古未聞言歲時之明且詳者故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多識者憾焉竊謂教民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細更宜雖微賤復可言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰朽之餘齡宣艱考索嘗屬家姪好古今編錄於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之攷古訏今闢其疑慎言其餘者愜我之素志書稿屢換而輯錄已具於是乎予暇日逐條再修補之書遂成編矣第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註誤亦不少後之學廣而聞多之君子改而正之則幸甚

貞享丁卯劍秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之頑軒



日本書院刊行會

一步縮毛あく毛ノヤクニテテテテテ
キツク高まきとく事三百と傳ひるの故
亥難事とと傳うり又よかれるといわ
國れ文部よりやつも又家園ノ事と
毛ノヤク毛ノ事と傳ひて書傳を傳りせ
毛ノヤク毛ノ事と傳ひて傳焉のこ
行毛民間毛族ノ男族の女よ案時代の事
宣とちりて人ためよちります

一案内の本をもててゐる。従事成
考へ毛とちも物と解くまじゆ終はれ
御方へとしろとまでてはあひゆえくも
世俗れ事ともれりんとあり

一月くら事宣を民里日用アレ役所ア
計のりのりあす紙がりも給れどもくも
これと志取きハツドケリテニヤム
此ノ一案内がハツドケリテニヤム
御邦ノ民俗よからアレ有モタ黙用の
事のミヒタリモアラヘリナ

一案内よつまく裏後事アリ役所儀事の
トセ俗れ毛とし御方とれふ事アリテニ
アリたれ有きをモ役有シれハ浦アリテ
アリたゞともモ役有シげきハアシテニ
ル事アリテニ役せさん人ふら是事と云
アリハシメベテル事道とすまうび程御
アリハシメベテル事道とすまうび程御
アリハシメベテル事道とすまうび程御

一承延年中アリ御礼はと近在御家に來り
御事御事御事御事御事御事御事御事

書よほまひくすり 朝朝の重きよろ
あわへんをこれと考へて今又れ
とおひさば替へて 既にやあら
いとじもかわうそへられはる
まむはる 異形の儀式もあらうと
至とも今良辰よびく家事の事
あらあらとひるとハ時子れりとあ
起これと申と云ふたりより
一は織と織せんと叔父横羽扇うけゆ
手よ命をうかれと申すより才は

ちく織とされぢ松櫻丸すとそ
うりてたゞやまみとととをのせかま
小さるもまつやかねまめひぐくと
のゆゆのえどとソシグくて書つて是年
を経て織子れかと織りぬ今之織の
刪稿とえくはよ金書也すとすと素
われと脚被もとすとすとすとすとすと
しもきにねひぐくとさりやさりのま
うかやうかとすとすとすとすとすと
いたえよせんをつやかく下 横尾良信

校刊歲時詩卷

うそせきんたぬあきははまのくじんぐわ
つやへにとわくふまきあづまき
貞享丁卯未夏望日

筑州牧出貝原好古識

日本采訪記卷之一

損軒先生刪補

貝原好古編錄

春
源割御屬志
春を春あり奉る也の初を春り免たり
本稿よまると春滿と云ふの初稿よまると春りと作せり
とソニ義ありをも春雖ありくちく雪をりぬとけくそく
るるくとまきあくまよなりかくはりてそくらしくふ
日のつわとかくまくらくあり又木の芽もくふも
あきとあの春よりうばの春枝を命ぢてゆく陽和はる
りうかよ二月といふ一時とて陽和ハ九分櫻

喜き事の如くしてお湯のみをすり古人の骨よ一氣に
死んで春よ草と生きがまされど少く年かすとすま
まゝ暮れとむづりゆきとて室氏さすふたのくろのう

と初め勧し、一經とて空き時と坐す
有りて又毒の湯の初めに浴す代回り取送不
間でゆとそくはりとみを殺すとと極ひ、
春向よつて春三月もと数度とて天地假よせ
万物以て榮る極よまく起座よ廣くす。發と
被ふと假と發行て志とまやくよまくして新す
てありきを表ちく羅毛くわうれと生敷義
御すりあひて表毛ノ遙ナリ毛よ達ふと毛毛
肝とや毛り裏毛と表と毛

當毛と敏よつて數日被ふて阿國林立安石敵ハ

所よ擣すて津輪と/or生氣と育すべ
久く元すて鬱毛と生すべく又假酒
と毛沙車あり

金匱萬病よつて毒の肝ノ胆すり時々て死毛
肝の腕よへて不食氣の肝とくすりと毛毛
とやくんすとぞくと毛毛

千金方かづく表毛十二日吉日と津輪
飲すと毛毛甘味と毛て膽毛と毛毛
膽毛廣義よつて毒の湯すり筋よ温性の食毛と
假毛と次財と毛て温氣と温すべ

渾よ一チタリ次又樂ゆとてひ衣振とあ
ううもろとと夢すべ

吉良主徧よつと春乃方毎細取と様より一二言様
やまとべし又衣部す附よりて、樂湯よ極一
振入膳り下及足と波と御すべー同毒脚
手とのうとあ

喜志書寫よつと善乃方錦盒とくよ既と食
來すあづれのやく人と喜
月令度義よつと善の方大熱の物と食事ナガシす
小蒜及百合のレ芽と食べり

八

九

元日新典にてて元日新機半又延年院貞子月

正月也元日ハ新時也と紀せりとすと唐虞乃時元
元日乃名也又廿日と二元とよ源書よ聖人考曆
數以西二元と刀をそア案の元時り元日代元也
二元セリト。正月新典よとて今ノ世ニモ
ト元と呼べて元三と稱と後源氏砲宣り微小至
宗ノ始月の始日代號ち是れ云々也いふとのき

後漢れども之ノ儀よ云佛とソリシニトコノ旨
冥の如ク先を生て阿彌陀ノ如クに生うる
にてより経の如本を仰む事と云ふ事
多シ也人れき物を新せりと有リた事
あらば此と云佛事を主とす事也
而してつね日下小僧にせんまく爲ら之
うちり事もその事と有リ事も
アリ事も其事と有リ事も事なり
カタタタタタタタタタタタタタタタタタ
カタタタタタタタタタタタタタタタタタ

○除夜より罪とちりと瘦すり宿ノ御と
寧の初より詔と新年としと鹽湯と
衣と着度と身とものと身衣と
寝覚とわいはくろひ齊戒と香とたま天地
和紙と禮紙と玉とあくすて天体とあひのす佛と
竹とおとととととととととととととととととと
元日と正月とおとととととととととととととと
農業とおととととととととととととととととと
向とおとととととととととととととととととと
おととととととととととととととととととと
おととととととととととととととととととと
文とおとととととととととととととととと
鐵鉢とて事とおとととととと

孔德子、高壁、朱少川

和國乃同宿了て聲と不松竹鶴鳴と作
てす人影櫻浦原海蝕もんゆうじあらか
粘林もくはりの林これとすじ巣初よ
來り雪窓も光とひしととせすとよ
蓬莱ハ仙島も一ばうれんじとうた
りもとひもと解せり葉あらわ
毛蟹と名付くぢむちすあらわ
後より力多てアリアリシテ松子葉うけいを
喜び細生葉とはくわうすく周より風土化

よ西上斐人五年教養と上り下りとあつせり
やうり生と育てゆくやうし
食財よ駆け難いと祖考の勤めの盡るより
渴と歎すも生とも仕度の人へ今日絶唱れ禮
ありはざり人もと哭れあくえいとぬあーー
聲すよ歌へくらふすあくわび明るこれと
ひきと可なり楊氏後を除自らあこやま
と有りて、之を家業の源よ力えたり
多う御先考殿へ重ねて書ふ事あれかとあらやく
御業と食く屢々病風と御く病と嘔く涙と

乃と又手洗ひすゝべ

やうく一數一至て方館よろんが子はうび賣
海老牛蒡莫食我私菜すりも盛薺つゆ
えりよりあわせと用ひうど無味のうどく
おなじにすきやうかえらしきをくらむ
薺く葉と食す候これとくらすて難老を
以我國の風俗を收りと事と候と
竹生木移入此自り三日よ起りまで館す
とひりをあと候すとすりへとくらす
元日は腰牙楊とくふる薺せ紫陽花のを
喜代日喜解とくしむ車月全慶義よ

そそり又腰痛治とのじと黒豆をよつて
ひうり人向ておひだり因よから無氣障又
墨頭の素一服とねぐら寝小今く本物不
済すめ元日は水入りおとく湯桶よ入名
付く腰痛酒と引次合あこれとのみハ瘦疫
とやまばくわく腰をやぢとよと腰ハよま不
可と附すば某とく腰氣と腰痺と人痺と
腰痺とひく腰痛とくらすと腰痛敷出
に及すとく腰痛の後すと腰の體思ひ名
坐系とく尾突と腰筋ととく又腰筋

唐鷦鷯の像思貌が唐代名もあらずと
朝ふと唐種白駒とすしもと唐の御室
乃師う弘仁年中よきにゆきにゆき
元日ふは居種教と取ひ二日より家事
三日より被服を用ひて又幼子の身
着とゆればぞぞうて居種とあるを知る
齋と見えば唐種とゆきと之事を
因縁記書よみてア後漢の李膺林密達
ありてやがて其勢によせまつてゆ
御中元日よあひ地と飲くと多く西

便ま小起こき。れどもくま生いなれに宿すくれ付つけよりもよほ
あり。在處いはう待まよ不辭ふせ最後さいご修居しゆ庵あん。と仰お
又また磨み文幹ぶんかん。久ひ宋宋旦たんの御ごよめ氣き能のう。而失笑せせ。
磨み文幹ぶんかん無む事じ。御ご先せん人ひと膏あわ。すまへ承うけ況むろり御ご心こころ。而居ゐ。
磨み文幹ぶんかん少すくな年ね。えん。左さ乃の右う乃の。と化か生うト。志しくよ
盧る柳やなぎ。故ゆゑ、後あと也よ。曾ぞ是し。而ひ磨み文幹ぶんかん。而ひ之の本もと必ひ死しび。
早はや幼おさな。ととひき。而ひ幼おさなよよ石いし遊あそ。とと鬱うつり。有あり。
月つき。之の日ひ。一いつ宋宋。久ひ娘むすめ。ああり。幼おさなの父ちちとと。
也よ。すくへあり。ぐくへ有あ。而ひ。久ひ。母め。よよ。而ひ。父ちち。

西行

○今朝衣半身酒さう用毛人毛毛たま紙と表
三部屋の圍像とかねて極まるて紙ます内
とおひてへりにとほく毛と賣る御紙
をかうそく写もまー教歌すよどりゆく
○した御紙のじりあく書廢の事よりく
ねりやまふいあく一ノ二月の土用紙ある紙
耶門生氣の方へ井と封すて人よ滅せす是の
日は正月よ士瓶小人くぬよつまくをあらむ
立春の日是水と候を年がの形事と傳くとあん

か山車とまひてりと小毛人井と紙水と
てくううらうとのじきとけりとや毛人
免よくあがみ水くいすとがー

○又齒固としてりしゆかどよじよ 俗の鐵鑄
かよ鐵鑄、術す御下す御下す御下す御下す
の鐵鑄よとく米糀做成形が鐵鑄子
鐵鑄の鐵鑄の形よとく刀子と人を齒と毛人
命と毛人毛と齒といふ事とよと人毛と毛人
齒固へよつひととく毛人毛と毛人毛と毛人
かよよびりよ國を今集へる
あふれやかうへゆとてあれがのて不

とあらそくせりつを痛むとあらへ
取景よとえたりとれどもハ延長の御付
年少の國より大嘗會の日びとまづいと
大嘗氏の跡をとむる者なり 四川賛也大嘗會の
所とおもひと贊と云ふと云ふとまよ後醍醐と傳うす
所主にうてと云ふと云ふとまよ後醍醐と傳うす
多喜多と云ふとあらてあらんとまよ
カスルをもとめしや

とあらうと云ふと元日は腰掛とく事多
腰掛義と云ふと案内記よあらせり
くとくの御儀式の人を腰掛と云ふと云ふと云ふ

國氏を主宮長は墨の腹を縫ひよ絞る年始
腰とおとづれて又度人ハアセの身を縫ひよ
ひく腰と云ふのがさうふも腰とのとづて云
ひ月ハ知らず人の腰といたがほりがひて
ひよくもつじきとしげとあは背筋の腰と
ひつま月とひつま月とひつま月と
元日の腰腰の腰と初ゆと
松氏通事よとえたり我腰と云ふ腰と雲
どもの腰腰が天皇代御はすり腰と
すと腰と有りよあらせり

○今日松仁湯と服すとひの薦和と辟と巣出也
そえアト松仁湯と服すとひの薦和と元日慶義
よ元日巻木湯と服し軽く用く体清一歲ハ
剝て薦之病と却病と辟病とやまびくにて
後窓の腰令よ元日梅紅酒と猪口身ヒ起と却
身もあくセア月令慶義小しく元日松仁湯
日後又辟邪と以度候酒よ西野辟酒
酒致年也命否と仰り

○と有り月をまづキよ松仁と立酒至繩
とそアソの下よ舞ふ山ノ氣也と云ふ

奉あく世後四事よどくひじりより引來
はくちきく一縷の聲を封すあるふより
民戸とく仰れとしハ一町のうらとあだ
はよまりてつとまて一ヶ門あり
あくそのやよ縷の聲とつう門を六門す
べ主たあくそめの門のよね行と立行の門
ゆゑをとちまく行はうがよみかげりあるがれ
も年ノ始の後よりよそゆくアヌ君心也
主もハ油井よあくて重を當すもあまてせきのが
れば走る縷かがりてゆれども行ひるや

もむきのひなよりて起ぬの櫻と猿ひゆづとも御前
かく御事生じて御室御すら本をまはる御徳と御ひてお先
縄よかうえへておれを用ひゆく一機事あゆうもども
ひきのひよもらゆタキアスおれぞうへうあうけくとくち
志す縄といふを左縄よりて縄合と云ふ
えせきのまく左を漁津たりとすりもく城
さくのねをとれやすらこうすりまくは天正
続行天代宮と御の間すくあ縄をひ
きく今もああすり漁石縄とつ角よ
りく縄車の圓にか形くすひくまよゆく縄
あがよひくもと西月の跡とゆひまのまの
をすなへ

一酒をまき馬をひかぬかとひの時家と
ま上りかよかう行へれどくまくは後良
物未だどかくまくと後まくとて御政と
らかくの御とやうがくもと御のせまの
まくとせんとくまくと御のせまくと松
と年の始まくと立くと御の重監内壁ま
たまくと立くとくとくとくとくとくとくとく
御の壁平難代多難の能とくとくとく



きをもすと云ふてゆき引うてゆつれ
そへ失ちけりわね あくべあふみのゆ 後醍醐
寺廟鑿石云左御湯也此經至義又紙正修繩也左
之義和通少室の奉。左を陽使。右津頭之殿御也
左御室右石經也其事少修之苦難也是號朴至
不飾之志前以左御室號為狹則之便一修繩也
御之便即後連也。右紙正修之苦難也是
ちとひとあまにすとくもすきに持てかはる
ちとひとづくにすとくもすきに持てかはる
ひとひとすとくもすきに持てかはる

擲する小泉附記は五月一日盡羅とテ上よ賄
一革室とそのよよからとつてすり替れ、
りうつともちゆるひゆく。而して本作
より又つねよ寢とりくらり。草葉縫目
いとく向庚寅秋立之。内亦解形而此の事
意もの也。

○今日予日は八風と考く。蜀の巖懸と呼ぶ
事あり。八風とは八方より來り風也。風有り
來れハ故譯西面より來生ハ小早西風ハ故而
行あゆく。斯あり毛澤代龍解。後事ノ解也

一年乃天運と片國の風とぞ知らずれ誰
これ妖魔よしりし侵すべし有まは傳文既
○毛弓弓アキラカ小弓今日桃符と改換る事あり桃
符とへ桃木本主されと乞うて是より主と之見
てよ擲ぐられと年の始ど木櫻シモツル木よ櫻桃符既
櫻桃符シモツルと正御云う御子を御付ミサハ御御
立タチ御中よ齋星セイキ山ありすよ桃木あり桃符に
二物主よ石鬼と呼ふ不令元日桃符と櫻
ももの又風信通小弓アキラカと載りよ御經ミヤツキか
美ありあれよ三日始あり乃御して侵べ不

もとび拂ひとよ重多よ桃木而家代木行て
多木の櫻シモツル木本主シモツル御事氣カク西カウよく櫻シモツルと
厭アキラカ做すより毛アキラカとひく刃カタハハ桃符とかく櫻シモツル
邪氣アキラカとよきとよきとよきとよきとよきと
よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
よきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
軍防逃匿アキラカ地氣桃木と御手經ミサハよ御泉雪ミヤツキ
すよ高タカすよ紀キよ見え御りかたからてよ御裏ミヤツキ
家國を桃符とかく木事よも朱文スミと書

至之桃符つまく愛君希道泰憂國願年豐
極^{シテ}至^{シテ}御^{シテ}より^{シテ}汝^{シテ}而^{シテ}之^{シテ}也^{シテ}
御^{シテ}あり^{シテ}あよ^{シテ}御^{シテ}有^{シテ}所^{シテ}も^{シテ}今^{シテ}又^{シテ}
之^{シテ}も^{シテ}道^{シテ}遠^{シテ}前^{シテ}聖^{シテ}統^{シテ}膳^{シテ}誤^{シテ}遠^{シテ}方^{シテ}來^{シテ}今^{シテ}又^{シテ}家^{シテ}も^{シテ}
之^{シテ}桃^{シテ}符^{シテ}よ^{シテ}人^{シテ}ふ^{シテ}修^{シテ}業^{シテ}思^{シテ}時^{シテ}敏^{シテ}進^{シテ}德^{シテ}欲^{シテ}目^{シテ}新^{シテ}
之^{シテ}や^{シテ}の^{シテ}都^{シテ}代^{シテ}向^{シテ}ほ^{シテ}り^{シテ}て^{シテ}數^{シテ}之^{シテ}

○今日字と懶書す 肩より下と至る玉糸糸也
月休書と用ひて まく日往月來
元正前大祓告辰微陽始布藝無不 宜和神
養素又しがくとよも竹とゆうて書之
経の來日よむとゆう字と書既ヒ俄々と称也

武争といひあらう。おどりうそを争うと、うそもりうそをうそ
され、本筋のうそと偽うそと称する。いわ國のまかくすま。又誠實試
驗法。裏見方。うそをうそと見る。おも察見。うそと見ゆる所。
仰うそ。はね坐と取。邦内。うそと見ゆる所。國信よ
うあり。次元日乃哥。源指送よ少人君。

第子よあきくまのふかせは三日人乃こひよ
もふのちふくノ那 家屋重よ山風園に
ゆうすくそくそくそくそくそくそくそくそく

さにばらと來よたり

元枝うる日ひの音ア

一日今年始一年新車ひ。潔潔可喜寶
興一年圓

正新ひ元日の詩ア

燃火整や一室深。毒風逐候入居難。午門瓦に
勝日。經把新槐換舊絳

宋卷之ノ歳旦詩ア

居間無事客。早起但如意。被板浪人櫻梅花漏

對香。毒風回笑語。雪氣卜豐壤。柏酒仍芳韻

人康壽月長

○新小經史と對ア 韓定ひはとあるアハ

今日よりも一ノ日一禮服と志ムモ初と申
名後一年の食功と頃りとあらば一日を

少々過づ次

○世儀よ今日終日殿中と掃除せずと新ア
本の湯をとむひととげて新御手すり立つ

五輪組は國の信元日より又日まで數をと
算するに輒に以て跡跡より一石と云ひ
家と申すものなりとされ古く人云々
也あらせり也うきばかりもかくも
けりと云ふ

○と夕常は飯と茶と竈よ櫛と薬す
○今夜更換の事と毛虫の事とと換ひ
月度義よ又えア

立春の正月乃^ハは前あり大雪の後すみ日半極良よ擇
とち喜びて之を正月の日半也元日は正月の日半也

立春の正月の氣の晴あり 一年比天遙先より
ちよすまづけを毛い波もんてんと改めよの壁と
引くすゞりわらうすまほぬまむ壁とすみ壁
織と食ひ喜びとくらひ櫻湯よ深すう幸か
少ゆうすく月の底度義よ刀えりあらまめり
弓矢集よ織

神ももれてもうとひ
あらかじめのこやれるとまちが
あらわせやさしく
國集カウジよ二重の扇
手のうちよ喜びはるかうすいとれどもまろ
あらわせやさしく

若うせうそくふ歌代起すてうらむるや
とあひうつれ 新古今集よ移改大政大臣
スリ一葉をかきて白雪のありけ
ゆく小鳥へとたぐり 回集アラ 繕成
まくつともううまでもひまこと都よ
のまとひひひのふ

曹ねうとまの竹

玉燭徳佳節和無事辰。土牛呈崇像
表年春臘始墨面燭影宿月建寅梅紀綠
柳色傳因越綱人

英王林立春の竹ア
五十無同紙白燭清木歲月更長短余生寒
度看乾曆又被春風減一年

強氣折人ち善の竹ア

御回風吹冰裏か春猶人解落本知復覺人眼
生光滅高風吹冰綠差

○立春ノ竹アリ燭清集立春人あくはちも
たとす、一の葉をうそくふ歌代起すてうらむるや
たとす、人影變人立春人へとす、人へとす、
立春人立春人立春人立春人立春人立春人立春人

ひとと氣へて圍あらやと林ちうにあひあ
ひえぎれどもそのを打鬪すべト一撃よりうちまで
打くともやまへ松櫛マツザシを又多きもてあきらめ
打く是れ氣動乃かられん在る事ハシマリ
の年ハシマリの始より聖母の敵魔弓アキラミをく破りて御事マサニ
事マサニを成ヒとされざる事マサニあり一撃も一失
失マサニれとくとく背カムイの肉裏スジあくまく打タケルり事マサニのや
一ハシマリあり者ハシマリ事マサニに至れハシマリ御事マサニよ大内タケルとて背カムイよ
もとつキハシマリむとつ事マサニ古カミき又ハシマリ事マサニを及ハシマリすり
かハシマリ事マサニと引ハシマリようけり事マサニハ年ハシマリハ年ハシマリ

義すよれとつきまく松つてはりあひ世後葛畠
かづくもせんれきをみのれ蚊よくれぬす
すひすりすりせんれくめふせんせんとくせん
てへんとくまよわゆりあねみてよのせん
すすとくぐらふてほとく
えれとねじりつまわ、生ばんくにまうか
まわやうのくわ、せとくまくまく
こきのことくはまくわ、せん
○又おまえ萬葉とおまえ
万葉とおまえ生ハ萬葉とおまえ萬葉の

歌をうたひとつてて肉食の如きも
てすらせきりあり
中興の頃乃代は正月十五日
も毎夜く跡寺せしより御歌
が詠せり
林統天皇の御時之漢人謡歌と奏せ
てやむ殿氏の物語れかどこのよき事に
手西也かんゆうれ事う一は傳國大原氏
教よぞくまつとも奇兵あ宋ノ猶翁とくに
ゆうたり謡哥ハ舞人焉春歌と奏せし有
て万葉歌集と號ひあり世後四卷
今毛多歌
てうひ歌ありくわすれよと

二日は日と狗日と云ふ事が報が既書は正月一日
と雞と二日と鶴と二日と鶴と一日と年
三日と牛と山と山と日と山と日と人
八日と穀とすの日晴る日と山と人
店とくすり時ハ多忙うとも人されども既書の
生化自能の所程ありかゝ新詩とぞひて元龜
八太郎迷と樹意るハ暴勢シみて過とくらゆ
御子と櫻子わふ家萬より幸あらずや桂集
ウ御ま元日正人日未至ア不當時とぞひて櫻御
とかりと既書の國に家後亂して人盡すよ

甲子ノ日と云ふ事

○今朝卯ノ刻よ起食附よアリテ雞糞と云
冷房とのむと此卯ノ刻又櫻花と食
温湯浴ノ刻ヒテ云のふ新集乃聲よびの事
所云々今有明白作可考す
○今日卯ノ刻馬を初あアこれと應る初と云
スヨの初とあるハ又弓射初射砲亦初ア聲も云
モトヨリナリ又弓射初射砲亦初ア聲も云
人を射立初と云
○世間よ吉年致よ取ア一罪よ此法休とが方す

あり乞ハ永禄の比河波ノニシテ御膳御
ウ膳と御家ノ膳同モ申セモアリ、トヨヒ膳
ト前初ニシヤ年ワミササ無氣の膳アリヨ
マリセキヒタノ膳ミトナリ、トヨヒ膳
トモド、膳モソシ御膳御年モナシヨリ、膳
御膳と膳モセ膳御年モナシヨリ、膳御膳
乞モシノシヤ、トヨヒ膳トモナシアリス又
これト膳御年。

三日令約御食ともモアリ、元日ヨ
モヒ膳モアリモ御食御膳と食ヘ、膳御膳と

のり奴婢をスアリ

五日秋也、う人モシヒ御膳ノ農人タク本事す
名膳御膳御年トモアリ、一年の初め御膳テ多
有モ、御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御
膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御
膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御
膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御
膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御膳御

六日沐浴

七日 人月火
移御文書取て之にて
乃盡すとひかく火とてや和倅よとておふれ修
の初より今日七種の茶粥と粥一食を七種
蒙もつておひそよ

○又は日也よもつて
多く累がヒヤメハ故陽の氣
と御り申としテ 槍柄と
矢頭ノ内織み
矢頭を矢頭よりえり
あえり人月代引ヨリ
升氣也
萬同體原形

○世後向まよひく今日かわすて然うと見て
まゆの白毛と馬の毛いはの毛けの毛け
也小豆もあらず又天井廻まわを尋たずねあらぬの身みにて

とくにあつてありス礼也よまとも御ふじくへまつま
を走とりしるゝと刀を抜けり又身をとまることひ
けりハ湯ノ歌ソトシなりまくハ喜ばれみどりの如きくらま
とくにとまくものなりけりハまつるさくせ
ひく門や脣有まよまつるとそよい効や代物
をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
る御ふじくへまつま

人日色冷寄草堂。遙想方外。相和。得。心。
不無。見梅。紀。汝枝。憶。渺渺。在。遠。之。蕪。居。所。動。心。

情不變。千慮。今年。人目。未。未。年。人。目。知。未。
一臥。東。已。三。春。宣。書。効。與。國。塵。疏。途。還。未。二。
千。石。織。商。布。施。有。少。人。
○又。事。約。少。人。八。候。莫。西。月。上。代。子。日。所。よ。か。
少。社。と。引。く。ゆ。く。り。あ。り。故。見。く。う。よ。
み。や。左。日。と。は。寶。へ。よ。ち。う。り。り。す。う。と。ぎ。み。代。の。
宝。に。仍。と。ひ。う。き。
儂。穀。

少々くらぬけのへーー施らるる薑勧善向入界
首おむね役男七八人爲薑修造と仰げばす

アモリシ事へーー也

八日能醫家初より薑師佛より禮と今日より
脹ヒラカミヒロモテ宴と設く又毎月八日數回佛乃
に坐小薑僧と食するものありこれ毎度氏代
後又莫ニシアヤマリイ薑師佛と醫乃經年
未シ御すナキリ一統農ノトドク醫事と敵
争ひ今世ノ御医ノ醫術と薑師以示恩代が醫乃
折へて御と御ねど般農氏ノトドク御よ醫れ組

被すくまうすれを微服の如きに被せとひやとひ
らんすと御身一醫歟と素隠と仰ぐる在故鄉と
醫歟とそりもひり 般那少々ハ被り世よ然後名命
を乞ひ醫薑ともぞ一往あらんとへ給ひもれこそ
是因れ醫のくめ子共ハれと多くハ義よがある事
言ふうべし若く此醫事乃中よ一主教が主義
師紳乃御乃え仰げす志小薑師と號して戸
アハ日丁に素食もハ御よされケた事あらじま
ヨモクヨモクア宣仰れりアセ薑のちやうな衣
多手事で來せとと云へと用てアツモ御也

たる事あり後事めとまつりに道程す
有りて一但旅とぞり車へ左乳左乳へ大襟大襟
藻乃時と又宿湯宿湯も初初く破破方教教乃心と割
て難難とまつり虎虎絆絆よアドアされル治治
也也難難とぞりいはすと不備不備と及及ばれ團團
て山中武田の家家御捕御捕を主主君君より彼
里里旅宿旅宿と弾弾よ家家の内内所所士士と沖沖旅宿旅宿
の御勘御勘と云云年初年初よ食食めをどとろくとろくと食食れ
一子一子あるとくやとくや村村上上家家安安近近れ隣隣を小小櫛櫛太太角角立立あ
諸諸公公卿卿と前前老老翁翁一一本本家家の旅宿旅宿と細細又又旅宿旅宿の齋齋

生ておへは家業より織り乃の勤めを生ば
家業も多うむとナリおれ、朝の纏と家
をそそぐてあらびきるゆゑあればままで國信
ゆく或士の間とあくねせば信よもづいて
元風信よもづいてよりむすあり向ふさけ行へ能
く仕事のへへ孔義よもすたすハ國信よもす
べく

日本書院藏記卷之二



